
赤い服の少女

冴木 昂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い服の少女

【Zコード】

Z0300V

【作者名】

冴木 昇

【あらすじ】

看護師の美奈子は夜勤のときに老婦人を看取った。いつも穏やかな老婦人が、臨終の間際に残した言葉は、美奈子の胸に深く残った。遅い、と。

老婦人は何を待っていたのだろうか。

美奈子は死んだ老婦人の病室前で、赤い服を着た少女を目撃した。次に見たのは、交通事故の現場。そして、末期がん患者の病室前でも少女を見た。追いかけたが、少女は煙のよつに消えてしまうのだった。

そんなとき、命の終わりに現れるという死神少女の話を耳にする。
まさか、あの少女が？

美奈子はベッドに横たわる老女をじっと見下ろしていた。蛍光灯の灯りの下、血の氣の無い肌が口のよろに青白い。清拭を終え、洗いたての浴衣に着替えていても、もう彼女の目は一度と開かない。穏やかな笑みを浮かべて、「看護婦さん、ありがとうございます」と、感謝の言葉を述べることもない。ましてや、嫌悪感たっぷりの表情で、美奈子のがさつさをたしなめることすらもないのだ。

老女の亡骸だけを残したまま、美奈子は処置室のドアを開けた。母親の急変を聞いて駆けつけた家族五人が、処置室の外に待っていた。

老女の息子と思われる中年の男性が美奈子に問いかけた。

「あの、看護師さん、母は？」

美奈子は背後のドアにちらりと目をやつて言った。

「明け方に息を引き取られて、いらっしゃいます。今、担当の医師を呼んでまいりますので、処置室の中でお待ちください」事務的に言つて頭を下げる美奈子の横を、家族らが慌ただしく行き過ぎた。処置室のドアが開くと同時に、女性のすすり泣きが耳を打つ。美奈子は足早にその場を立ち去つた。俯いたまま、内科病棟の長い廊下を歩いて行く。閉じ込めておいた涙が、とうとう溢れ出してしまい、廊下の中ほどにある患者専用のトイレに駆け込んだ。

看護師の仕事について、もうすぐ三年になる。特に末期の患者さんが多い内科病棟の担当になつて丸二年が経とうとしているというのに、それでも、お世話をした患者さんが亡くなつたときは、いつも動搖してしまうのだ。

どんなときにも冷静に、努めて明るく。

看護師長の口癖を思い出して、美奈子はトイレの個室でため息をついた。トイレットペーパーで鼻をかんで目元を拭うと、何とか感

情を抑えられそうだつた。早く担当の先生を呼んでこなればいけない。当直明けだから、担当の佐藤医師はきっと自席に居るはずだ。

また、泣いているの？

からかうように言つて、若い男性医師の顔が脳裏に浮かび、美奈子はぐつと唇を噛みしめた。

トイレから廊下に出たとき、田の端に赤いものが映つた。何気なく振り返ると、廊下の向こう、先ほどの処置室前に赤いワンピースを着た少女が立っているのが見えた。少女は処置室の閉じられた扉をじっと見つめている。ノースリーブの肩口から出た腕が細い。背格好から考えて、年齢は小学校高学年か中学生くらいに思えた。亡くなつた患者さんの家族かもしれない。美奈子は少女の方へ一步、二歩と戻りかけた。すると、少女がこちらに気付いて振り向いた。小ぶりの顔の周りを、漆黒の髪が縁取つているが、廊下の薄暗がりで表情がはつきり見えず、美奈子は田をすがめた。

「川辺さんのご家族のかたですか？」

大きめの声で問いかけると、少女は一步、二歩と後ずさりをはじめた。美奈子が足を踏み出すと、少女は逃げるようにして廊下の角を曲がつて走り去つた。長いさらさらの黒髪が、華奢な赤い背中で揺れていた。

「瀬戸さん、またこんなところでぼーっとして、どうしたの？」

背後から男性の声がして、美奈子は振り向いた。男性は、レモンイエローのYシャツにノーネクタイで白衣を羽織つてゐる。下がり氣味の目がいつも笑つていて優しそうだと皆は言うが、美奈子については、ドジな自分の事を小バカにしているように見えるのだった。

「あ、佐藤先生。川辺さんのご家族が到着されました。ご家族は今、処置室に……」

「そう。じゃあすぐに行かなきやね。瀬戸さんさあ、ナースステーションに戻つたら、川辺さんのカルテ持つてきて」

「はい、わかりました」

一礼して立ち去るうとする美奈子に、佐藤医師は柔らかな声で言

つた。

「当直、」苦労をしました。引継ぎしたら、早くあがつてください。とても疲れた顔をしているよ。まあ、昨夜は本当にきつかったよね。僕もまさか川辺さんが……」

立ち止まって振り向いた美奈子に、曖昧な笑みを浮かべると佐藤医師は手をひらひらと振った。それは、「なんでもないよ」というゼスチャーだったが、どこか力なく見えた。

どうにも、いつもの彼らしくない。

美奈子は白衣を翻して大股で歩き去つてゆく佐藤医師の背中を見送つて、小声で呟いた。

「佐藤先生、なんでもないよって顔じゃ、ないじゃん……」

引継ぎを済ませ、畳敷きの更衣室で白衣から私服に着替えると、ようやくホツとする。昨夜一緒に当直だった先輩看護師の真弓が、慌ただしく更衣室に駆け込んできた。

「美奈ちゃん、お疲れさまね」

「真弓さんこそ。私が川辺さんにかかりきりだったから、他の患者さんのお世話で大変でしたよね」

「うん、でもほら、泌尿器科の山下さんが一時的にヘルプに来てくれたから」

看護師の人数不足はどここの病院でも深刻な問題になつていて、それを解消するためにこの病院では他科へ手伝いに行つたり、来てもらつたりすることがある。ただし、他科の看護師が手伝えることは、それぞれの科で「くわづかなことに限られている。医療ミスやその他、責任を問われることを防ぐためだ。でも、たつたひとりであつたふたするよりも、誰かに来てもらえると思うだけで心にゆとりが出来るものだ。美奈子も当直のときに、何度か他の科に手伝いに行つたことがある。

「でも、正直言つてさすがに疲れたから、早く帰つて、子供が学校から帰つてくるまでの間に寝るわ

真弓はすゞい早さでTシャツとジーンズに着替えると、化粧直しもせずに更衣室を出て行った。働く主婦はパワフルだ。真弓を見るといつも思つ。きっと彼女は、目の前で患者さんが亡くなつても、自分のようにぐずぐずと泣いたり、いつまでも気にしたりしないのだろう。昨夜、川辺さんの最後を看取つたのが美奈子ではなく真弓だつたとしても、彼女はきっと同じように家に帰つて、子供が帰宅するまで熟睡するに違ひない。

美奈子は後ろでひとつに束ねていた髪を下ろすと、カバンを手に更衣室を出た。

スタッフ専用の通用口から表に出ると、灰色の空が広がつていた。梅雨時特有の湿気を含んだ風が吹いてきて、美奈子の白いブリーツスカートを揺らした。今にも泣き出しそうな空の下、病院の裏手にある看護師寮に帰ろうと思ったが、体はとても疲れているのに、眠れそうもない気分だつた。美奈子は寮とは反対の、商店街へとつづく正門のほうへ向かつて歩き始めた。

敷地内に植えられた桜の巨木を見上げながら、記憶の中へと迷い込む。今は頭上いっぱいに緑の葉を茂らせているけれど、春は見事な花を咲かせていたつ。その、薄紅の桜を見ながら、亡くなつた川辺さんと散歩をした。ゆっくりと車椅子を押して歩く美奈子に、何度もお礼を言う老女。

これが最後の桜かもしれないわねえ。

そう言つて見上げた白い顔は、全てを受け入れた者の穏やかな顔つきだつた。

でも、昨夜臨終の間際に見せた表情は……。美奈子は歩きながらふるふると頭を振つた。

末期の胃癌は激しい痛みとの戦いだ。川辺さんは、延命治療よりも痛みを和らげることを望まれた。だから、最後は意識が混濁していたのだろう。

「だから、あんなふうに……」

美奈子は独り言を呟いた。佐藤医師が駆けつけるまでの間、美奈

子と老女は病室に一人きりだった。発作に見舞われた老女は、苦悶の表情を浮かべて涙を流した。彼女は、枯れ枝のようになってしまった手で、自身の口を覆った酸素マスクをがつと剥ぎ取った。制止する美奈子の手を振り払い、歯の無い口を金魚のようにな開け閉めする形相は、正直言つて戦慄を覚えるほどに恐ろしかった。それでも美奈子はなんとか冷静さを保ち、苦しげな息の下の、最後の言葉を聞き取ろうと彼女の口元に顔を寄せた。餉えたような加齢臭に混じつて、死の匂いが美奈子の首筋辺りにまとわりついてきた。

せいぜいという呼吸音しか聞き取れず、あきらめかけた時だった。血走った目をカツと開き、苦しんでいた老女がいきなり上体を起こしたのだ。そんな体力がいつたいどこに残っていたのだろう。今思ひ返しても、有り得ないことだと思つ。そのとき美奈子は驚いて、手についていた酸素マスクを取り落としていた。透明のチューブにつながつて、ベッドの脇にだらりと下がつたマスクが揺れる。患者はひきつけたように痙攣したかと思うと、声を発した。

「この小娘は……。遅い、何故もつと早く来なかつたんだい。まったく、本当に……なんて役立たずな子……」

呻るような野太い声で言つて、老女はにたりと笑つた。彼女がはつきりと言つた言葉を聞いて、美奈子は動くことが出来ず呆然と立ち尽くした。地獄の底から聞こえてくるような声は、優しい老女の声ではなかつた。老女は言い終わるや否や、どさつと枕に沈んで動かなくなつた。

今のは、なに？

サンダル履きの足音と共に佐藤医師が駆けつけてきたとき、美奈子は汗だくになつて震えていた。

「せ、先生、川辺さんが……」

動搖してしまい、うまく今しがたの患者の様子を説明できなかつた。美奈子は仕方なく、チアノーゼが出ていることと、意識混濁を告げたのだった。その後懸命に手を尽くしたもの、意識は回復することなく川辺さんは息を引き取つた。

鬼のような形相で発した言葉がいつたい何だつたのか、もう知るすべは無い。小娘とは、いつたい誰のことなのだろう？ 美奈子のことを指したという可能性もある。川辺さんから見れば、自分は間違いない小娘だ。

でも……。美奈子は立ち止まつた。昨夜のことを詳細に思い出そうと、ぎゅっと両目を閉じて、右手の指で目頭のあたりを揉んだ。川辺さんは確かに「遅い」と言つた。でも、自分はナーススコールが入つたとき、すぐさま駆けつけたはずだつたから、「遅い」と罵られてもどうしようもない。自分に落ち度はないはずだと、美奈子は自身に言い聞かせた。

きっと患者さんは苦しかつたから、一秒が、まるで一分のように長く感じたのかもしれない。

病院の正門を出て、ゆるい坂を下つていいくと、ぽつりぽつりと雨が降り出した。傘のない美奈子は、歩みを速めて目的地を目指した。『市立総合病院前』のバス停を通り過ぎて数十メートルのところに、レンガ造りの紅茶専門店がある。その店は、『紅茶館』といつ、ごくありふれた名前だが、店長の手作りケーキが絶品で、病院の看護師たちの行きつけになつていた。

もしも『紅茶館』で知り合いの病院スタッフに会えたら、このモヤモヤする胸の内を聞いてもらいたいと思つた。できれば気心の知れた看護師がいい。

そんな都合のよいことを思いながら木枠のはまつたガラス扉を引き開けた。スポンジの焼ける甘い香りが鼻をくすぐる。カントリー調に統一された明るい店内は、店長の奥さんの趣味でパッチワーキルトがあちこちに飾られている。美奈子は素早く店内に視線を走らせた。木目の美しいカウンター席には、誰も居ない。三つある白木のテーブル席のうち、一番奥に、黒っぽいスーツを着た女性客が一人で座つてゐるだけだつた。

美奈子は落胆して、大きく息を吐いた。どつと疲れが襲つてきた。彼女は高さのあるカウンター席によじ登ると、奥に向かつて声をか

けた。

「こんなにうは。お姉さんですよ～」

カウンターの奥から、Hプロン姿の中年男性が顔を出した。

「やや、こりつしゃい。今むよつビケーキのスポンジをオープンから出したところですね。手がふさがつてて」

小太りの店長は、メガネの奥の目を細めるよつにして、人懐っこい笑みを浮かべた。やはり「マスター」とこつよつは「店長」という呼び方が似合つた、と美奈子は思つ。店長は美奈子の前にメニューを押しやりながら尋ねた。

「降つてきた？」

「へ？」

「雨だよ、雨」

ああ、と頷いて、美奈子は自分の前髪をかきあげた。細かい雫でしつとりと滲つてゐる。

店長はメニューを渡しておきながら、注文も聞かずに勝手に紅茶の茶葉をブレンドし始めた。

「疲れてるときは、香り豊かなロイヤルミルクティーがいいんだよ」美奈子はクス……と笑つてメニューを返却する。さつき佐藤医師にも言われたが、そんなに疲れた顔をしているのだろうか。

「昨夜ね、患者さんが一人、亡くなつちやつて……」

「そつか、看護師さんも辛い仕事だね」

店長は湯気を立てているティーポットを手に取つた。甘い焼き菓子と紅茶の香りが混ざり合つて、美奈子の首筋にまとわりついていた死の匂いを消し去つてゆく。

末期の患者さんも扱う病棟だからといって、毎日のように誰かが亡くなるというわけではない。元気になつて退院してゆく人だつて、たくさん居る。人が亡くなるという感覚に慣れたくないし、患者さんはどんな病気であるつとも、命があるかぎり、きりきりまでもあきらめないで欲しいと思つ。そのことを店長相手に口にしきつとしたときだつた。

美奈子の視界の端に、赤い色が横切った。ふと入口近くのガラス窓に目を向けた美奈子は、バス通りを挟んで反対側の歩道を歩く、赤いワンピースの少女を見つけた。今朝、川辺さんの処置室前に居た少女に違いない。長い黒髪を肩まで垂らした少女は、自然光の中で見るとどぎきりの美少女だった。小さな顔に、大きな黒い瞳がとても印象的だ。

美奈子はカウンター席から滑り降りると、通りが良く見える四人掛けの座席に移動した。赤い服の美少女は、一人ではなかつた。黒のタンクトップに迷彩柄のボトムズを腰ではいた男の子と一緒にだ。美奈子はふつと微笑んだ。男の子の後を、一步下がつてついてゆく少女がとても初々しくて微笑ましい。絹糸のような銀色の雨の中で、傘も差さずにゅつくりと歩いて行く一人は、どこかメルヘンチックだ。

彼らに重ねて、自分の少女時代のことなどを心の中で振り返つてみる。初めてのデートは、中学二年生のときだつたけ……。

男の子は高校生くらいだから、あの女の子は中学生かな。雨の中の一人から目をそらしたときだつた。

大きなブレーキの音が響き渡った。ほんの一瞬の出来事だつた。美奈子が再び目を向けたときには、通りの中央、赤い軽自動車の前に、男の子がうつ伏せで倒れていた。美奈子と店長は同時に店のドアに飛びついた。交通事故だ。

赤い軽自動車の運転席から中年の女性が降りてきた。女性は腰が抜けたようによろめいて、倒れた少年にとりすがつた。

美奈子と店長がバス通りを横切つて近づいたとき、少年がゆっくりと上体を起こした。美奈子はほうと息を吐いた。

死んでなかつた。

それでもケガをしている様子で、少年は一度上体を起こしたもの、すぐにくず折れてしまった。彼は苦痛に顔を歪めて、濡れたアスファルトに横向きで転がり、えびのように身を縮めた。美奈子は冷静さを取り戻すと、少年に駆け寄つた。

蒼白な顔で少年に取りすがっている女性ドライバーに、救急車と警察を呼ぶように声をかけた。すると少年が呻いた。

「お願い……。警察は、呼ばないで……」

女性ドライバーはどりしていいかわからないと言つた様子で美奈子の顔を見上げる。

「警察は呼ばなくていいから……。オレ、大丈夫だから。お願い……。五万円くれたら、それで病院に行くし……」

少年は口からごぼりと血を吐いた。もしかしたら内臓が傷ついているかもしれない。

「五万円なんて、今、持つてないの。せ、三万円しかない」

そう言つて、女性ドライバーはどこからか財布を取り出して三枚の紙幣を少年の手に押し込んだ。美奈子はキッと女性を睨んだ。

「なにしているんですか！ そんなことよりも、早く救急車と警察を」

「やめて！ お願いだから……」

少年は美奈子の手を振り払おうとして顔をしかめた。背丈が大きかつたから高校生かと思ったが、良く見ればまだあどけない顔をしている。もしかしたら、少女と同じくらいの年齢なのかもしれないと、関係のないことが頭をよぎる。

あれ……？

美奈子は周囲をぐるりと見回した。赤いワンピースの少女が居ない。彼氏が事故にあつたというのに、彼女はどこへ行つてしまつたのだろう。

周囲がざわつき始めた。道路を塞ぐよにして止められた赤い軽自動車を、後続車が追い抜いてゆく。美奈子はイライラしてきた。誰も警察や消防に電話をしていないのだろうか。また一台、黒いスカイラインが徐行して追い越してゆく。少年は相変らず転がつたままで「警察はやめて」と繰り返している。

今、追い越したスカイラインがハザードを点灯して、すぐそばの路肩に停車した。黒光りするドアが開き、運転席から黒いスーツの

女性が降りてきた。美奈子は、その女性がさつき店のテーブル席に居た人だと気付いた。

ステッフの女性はワンレンジスの髪を揺らして駆けてきた。走りながら大きなよく通る声で言った。

「私の車に乗せましょう。とにかく病院はすぐそこなんだから、救急車より早いわ。みんなでケガ人を運びましょう」

美奈子は大きく頷くと言った。

「私、その病院の看護師です。ご案内しますので、救命の搬送口へ車をつけてください」

女性は、集まり始めたやじうまの男性たちに向かって、テキパキと指示を出した。

「頭側に一人ついて。腰の部分を支えてね。そつと、ゆっくり運んでちょうだい」

少年をリアシートに乗せると、美奈子は助手席に乗り込んだ。携帯電話で病院の救命に直通電話を入れる。

ステッフの女性は、店長と事故を起こした女性ドライバーに向かって大きな声で言った。

「とにかく、警察に電話して事情を説明しなさいよ、わかった？」

スカイラインはUターンして走り出した。

「お願ひ……やめて」

後部シートで呻く少年の声がかすかに聞こえて、美奈子は助手席から振り向いた。少年はぐつたりと目を閉じたまま動かない。雨に濡れた右手に、さつき女性ドライバーが押し込んだお札がぎゅうと握られていた。

救命の搬送口では、男性看護師と医師が待っていた。ステッフの女性と美奈子が手伝つて、四人で少年をストレッチャーに載せた。

「今、ちょうどオペが終わつたところだ。手が空いていて、よかつたよ」

色黒の救命医は、白い歯を見せてにまつと笑う。彼は、ストレッ

チヤーの横に付き添つ美奈子を、まるで踏みみすりみたいな視線で見ながら言つた。

「キミ、内科の子だよね？」このボウズと知り合い？」

「あ、内科の瀬戸と言つます。この男の子は、私が見ている前で偶然交通事故にあつたので連れてきました。知り合いでないです」

言いながら、美奈子は色黒医師の名札に目をやつた。『救命救急・医師 浅川』と書かれている。浅川医師は「ふうん」と言つて、今度は少年を見下ろした。美奈子の逆側に付き添つていた男性看護師が言つた。

「浅川先生、この子つて……」

二人は目と目を見交わして、複雑な表情をした。美奈子は一人の様子から、病院内の暗黒のルールを思い出した。救命はとても忙しいと聞いている。飛び込みで急患を連れてきたからには、それなりに感謝の意を表さなければいけないのだろうか？

難しい顔つきの浅川医師に、美奈子は恐る恐る尋ねた。

「あの、私、当直明けなんですけれど、何かお手伝いできることがあればおっしゃつてください」

浅川医師と男性看護師は再び顔を見合させたが、そのまま何も言わずには患者を処置室に運び入れた。

何か手伝おうかとカバンを下ろした途端、美奈子は処置室外に追いやられた。彼女は狐につままれたように、ぼんやりと閉ざされたドアの前に立つていた。さすがに、救命にヘルプに来たことはないから、あの一人がどんな人間なのかよくわからないけれど、締め出されたということは、美奈子に手伝えることなど、何もないのだろう。

カバンを肩に掛けなおし、どうしたものかと廊下をうろついていると、男性看護師が処置室から出てきた。美奈子は無意識に彼の二キビ面から胸の名札へと目線を走らせた。

『救命救急・看護師 富下』とある。富下は美奈子のそばに来ると言つた。

「さつき、何か手伝うつて言つたよね？　じゃあ、さつきの男の子の身元、調べてよ」

「へ？」

「何でそんなこと？　と、問い合わせるような表情になつていたのう。富下が上からモノを言つた。

「病人の世話だけしてりやいいつてもんじやないんだよ、救命は。搬送されて治療してやつても、どこの誰とも名乗らずに、無錢飲食ならぬ無錢治療で消える不届き者がいやがる。だから、早めに患者の身元を確認しなきやいけないんだ」

そんなことまで気にしなければいけないのだろうかと、美奈子はぽんやりした顔で富下を見た。彼はイライラしたように言つた。

「さつきの男の子だけど、半月ほど前にも運び込まれたんだ」

「え？」

富下は、何が言いたいのだろう？　美奈子が問い合わせるような眼差しを向けると、彼は吐き捨てるように言つた。

「打撲による内臓損傷で腹ん中縫つたつてのに、一一日後に病院から消えたんだ」

美奈子は大きく目を見開いた。なんてムチャなことをするんだろう。どんなに富下たちが心配して探したことか、目に見えるようだつた。

「交通事故なら、警察に聞けばいい。救急車は呼ばなかつたみたいだけど、警察には連絡したんでしょう？」

警察を呼ばないで

呻くように言つ少年の言葉が、美奈子の脳裏に甦る。

バタンと背後でドアが開閉する音がした。振り向くと、処置室の向かいにあるオペ室から、ストレッチャーに乗つた患者が運び出されてきた。ブルーの手術着スタイルの看護師が一人、付き添つてゐる。廊下に立ちふさがる形になつてしまつた美奈子は、慌てて富下看護師の隣に身を寄せた。ストレッチャーの一団は、ガラガラと大きな音をたてながら、美奈子の前を通り過ぎた。ちらりと患者に目

を落とすと、小学生くらいの女の子だった。ずれた毛布から、首や胸に当たられたガーゼや包帯が見える。何本ものチューインガムが彼女の体から伸びていた。

ICUに運び込まれる女の子を見送っていると、隣の廊下がぽつりと言つた。

「さつき運ばれてきたんだ。あの子、大やけどを負つていてね。かなり厳しい」

「え？」

美奈子が振り向いた時には、廊下はもう踵を返して処置室に入ってしまった。

夜勤明けの疲れで頭痛がする。美奈子は暫くの間、救命の廊下をうろつと歩きまわつていたが、入口に一番近いソファに腰を下ろした。少年を運んでくれたスカイラインの女性は、いつの間にか居なくなつていた。

「みんな、忙しいのね……」

ぱつりとつぶやくと、また田の端にすりと赤い色がよぎつた。そちらに顔を向けると、廊下の突き当たりに、赤いワンピースの少女が立つていた。美奈子は目をしばたいた。いつの間に来たのだろう。しかも、入口付近に陣取つている自分の前を、いつ彼女が通つたのか、わからなかつた。どこかに別の出入口でもあるのだろうか。

美奈子は立ち上がると、少女に近づいていつて声をかけた。

「彼氏、今治療しているから。心配しないで」

少女はつぶらな瞳を大きく見開いて後ずさつた。なんだか氣の毒なくらいに怯えている。どうとつ背中が壁にぶつかつた。

「交通事故見ちゃつたんだもんね。怖かつたよね」

そう言つて笑顔を向けると、少女が囁くよくな声で言つた。

「あなたは……誰？ どうして私に話しかけるの？」

美奈子は笑顔のままで言つた。

「私はこの病院の看護師なの。だから、あなたの彼氏を助けようと思つて、ここへ連れて来たのよ」

「彼を、助けてくれるの？」

大きく頷くと、少女は安心したように笑みを浮かべた。まるで花が咲いたように可愛らしい笑顔だ。

「ねえ、彼氏は前に内臓損傷で手術をしたんですって？」

尋ねると、少女は笑顔を引っ込めた。花がしほんと、悲しい顔になる。美奈子は自分のデリカシーの無さを呪つた。

「あの人は、……また体が傷ついたの？」

少女は泣きそうだった。「また」というフレーズが気になつたが、とりあえず少女を安心させようと思い、美奈子は「大丈夫よ」と言つて少女の肩をポンと叩いた。手のひらの下にある、その華奢な骨格にちょっと驚く。

「お願い、あの人を助けて。私にできることは、何でもする」

美奈子は彼女が可哀想になつてしまつた。一刻も早く、安心させてやらないくてはいけない気がしたので、処置室を覗いてきてあげるト請合つた。

ノブに手をかけて、そつと処置室のドアを開けると、ちょうど手当てが済んだところだった。

振り向いた色黒医師が、マスクを外しながら言つた。

「左腕を骨折してるね。あとは、全身を強打したときに、前回やられた脾臓の傷から出血したみたいだ。でもまあ、微量だから、とりあえず応急処置はこれまでだね。後は様子を見て精密検査に回すかどうかつて感じかな。どちらにしても、数日入院して安静にしていれば大丈夫だよ」

美奈子はペコリと頭を下げた。目を閉じて横たわる患者を見ていると、背後から宮下が小声で囁いた。

「警察に、聞いてみた？」

美奈子はビクンとして振り返ると、宮下を睨み付けた。ケガをした少年を悪者のように扱う彼が、なんだか気に食わなかつた。もと

もと彼の二キビ面も美奈子の趣味では無い。

「大丈夫です。彼のお友だちが駆けつけてきましたから。」心配には及びません」

ややつりけんどんに言つと、富下は「そり、よかつた……」とマスクの中でもう「も」言つて、氣弱そうに目を伏せた。

美奈子は看護師寮の自分の部屋に戻ると、ビセラリとベッドにひつくり返つた。もうすでに三十時間以上起きている。それから体が限界だった。

うつらうつらする頭で、赤いワンピースの少女のことを考えた。美奈子が少年の容態を見て処置室から戻つたとき、少女の姿はどこにも無かつたのだ。あれほど心配していたから、まさかいなくなつとは思つていなかつたので、かなり焦つた。後から廊下に出てきた富下に、思い切り嫌味を言つたことも、氣分が悪かつた。

で、男の子の身元は確認できたんだよね？　え？　まだ聞いてないって、どういうこと？　しつかりしてよ！

紅茶館の店長が警察に連絡しているはずだから、万が一あの少女と会えなくともきっとなんとかなるだろ？

考えることに疲れてしまつた美奈子は、頭の中で勝手に解決させると氣だるい眠りの中におちていつた。

第一話 死神

翌朝申し送りのあとで、美奈子は看護師長に呼ばれた。

「瀬戸さん、すぐに事務局まで行つてもらえないかしら？」

美奈子は首をかしげた。本館にある事務局へは、この病院に勤務したときと、看護師寮に入所したときにしか足を踏み入れていない。もの聞いたげな美奈子に、看護師長が低い声で言つた。

「昨日、救命にお世話になつてしまつたんでしょう？ あなたが飛び込みで患者を連れてきたつて、あつちの師長に言われたんだけど」「でもあれは……」

「とにかく、なんか知らないけれど行つてらつしゃい」

美奈子は正規の手続きに従つて、救急車を呼べばよかつたと後悔した。目の前に病人が居て、いちばん早い方法をとつただけなのに、何がいけなかつたのだろう？

不満を抱えたまま、本館五階の事務局に行つた。ドアを押し開けると、フロア内は別世界だつた。男性はスーツにネクタイで、女性はベストにタイトスカートというかつこうで仕事をしている。その中で、たつた一人だけ、白衣姿の宮下看護師は浮いていた。

彼はフロアの壁際に押し付けられた応接セットに、背筋を伸ばして座つていた。こちらに向けられた背中が緊張しているのがよくわかる。彼の肩越しに、事務局長の険しい顔が見え隠れしていた。細面の顔に銀縁メガネをかけているが、美奈子にはインテリというより何故かカマキリに見えた。

フロアの入口で突つ立つたままの美奈子を見つけて、カマキリが手招きした。

事務局長の仕草を見て、宮下が振り向く。

美奈子が会釈をして宮下の隣に腰を下ろした途端、彼は苦々しげに言つた。

「瀬戸さん、やつぱりあいつ、消えたよ」

唇を噛む富下に問い返さずとも、美奈子はすぐに事態を理解した。あいつとは、いわずと知れた例の少年だ。

まさか、そんなことになるとは思っていなかつたので、今日仕事を終えてから警察へ問い合わせてみるつもりだつた。

「消えたつて……そんな……」

救命医の浅川医師の診断では、安静が必要だつたはずだ。

「まったく、一度も踏み倒されるなんてごめんですからね」

富下と美奈子は、事務局長から散々嫌味を言われてしまい、事務局を出た時にはとても嫌な気分だつた。

まったく関係ないが、自分が連れてきた少年がしたことに対するなんとなく富下に謝罪しなければいけないのかな、と思つた。

エレベータを待つて、険しい顔で佇んでいる富下に、美奈子は小さな声で謝つた。

「富下さん、『めんなさい』あたしが昨日のついでしつかり身元を聞いておけば……」

「ええ？ なんで？ 瀬戸さんが謝る」と、ないよ

富下は驚いたように言つて、隣の美奈子を見つめた。

「でも、怒つていらつしやるでしょう？」

彼の眉間のシワが気になつて、そう言つと、

「いや、悪いのは僕です。あんことになるなんて……」

「え……？」

エレベータが到着して、会話が中断された。背広姿の男性が二人降りてくると、中は無人になつた。美奈子と富下は一人きりでエレベータに乗つた。

ボタンを操作する富下に、美奈子は続きを促した。彼は寂しげな笑みを浮かべると、ぽつりと言つた。

「昨夜、やけどの女の子が亡くなつたんだよ」

美奈子は大きく目を見開いた。昨日オペ室から運び出されてきた少女のことだとすぐにわかつた。危険な状態だと言つていたが、ダメだつたのか。あんなに幼くて、まだまだこれから楽しいことが待

つているはずだったのに。黙り込んでしまった美奈子に、富下が言った。

「ぼくがもつと早く、あの子の急変に気が付いてあげていたら……」

美奈子はなんと言葉をかければいいのか思いつかなかつた。田の前で命が消えてゆくことの衝撃と辛さはよくわかる。

「でも……キケンな状態だったのでしょうか？ 富下さんのせいじやないですよ」

からうじてそういう言葉をかけたが、富下は背をまるめたまま俯いているだけだった。

エレベータが一階に到着した。救命と内科は本館を挟んで正反対の場所に位置している。もう少し、富下についていて話を聞いてやりたいという衝動にかられたが、お互いまつ仕事に戻らなくてはならない。

エレベータを降りて、一歩一歩と歩き出したとき、前をゆく富下が急に立ち止まって振り向いた。彼の目が潤んでいる。

「ぼく、職場を離れてしまつたんです。あのとき……。あの少年が消えたことに気付いて、病院の外を探してた。看護師長は急患で処置室に入つてて、浅川先生ももう一人の看護師と一緒に別の患者さん見てて……」

富下の目に涙の膜が盛り上がり、今にも溢れきそうだった。美奈子は慌てて目を伏せた。なんということだ。彼がちょっと目を離した隙に、あの、やけどを負つた女の子の容態が悪くなつてしまつたのだ。

どのくらい放置したのかわからない。でも、救命は一階にあり、富下が外に出るのにたいして時間はかかるない。看護師長に正直に報告したと彼は言つており、それに対しても咎められなかつたところを見ると、おそらく、いくわざかな時間だと思う。厳密に調べるならば、バイタルチェックの機械と照合すれば放置時間は正確にわかるはずだ。

でも、問題はそこじゃない。彼は美奈子と同じだった。肝心なと

きに、いつもと違う動きをしていたとか、精一杯の対応が出来なかつたとか、そういうことなのだと感じた。そして、そのことで自分を責めているのだ。

黙つて俯く美奈子に「「めん」と言つて、富下は救命のある別館に走つて行つた。

川辺さんの居なくなつた病室には、もう別の患者さんが入つていた。ベッドの空き待ちはものすごい件数だと聞いているから、病院側にしてみればどんな形にしろ動きがあつたほうが儲かるのだろう。こんなふうに、病院経営を損得勘定で見たことは今まで一度も無かつた。ここは市立の病院だから、積極的な経営をしてはいらない。けれど、さつき事務局に行つて思い知つた。あそこに居るのはみなお役人なのだと。だから、とりそびれた治療費のことをとやかくつづくのだ。富下の気持ちなんかまったく考えてやらないで、文句ばかり言つし事務の担当者に腹が立つた。

憂鬱な気分のまま職場に戻ると、すぐ近くの病室から出てきた真弓が心配顔で寄つて來た。

「看護師長に呼ばれてたけど、何かあつた？」

美奈子は廊下の隅に真弓を引っ張つしていくと、昨日の事故のことからさつきの事務局のことまですっかり話した。真弓は顔をしかめて聞いていたが、特に富下に同情するでもなく、事務の男性に怒りを向けるでもなかつた。彼女の反応に、ちよつと拍子抜けした美奈子は、気になつていていたことを尋ねてみた。

「真弓さんは、目の前で患者さんが亡くなることが、嫌じやないんですか？ それとも、もう慣れっこになつてしまつたとか？」

最後のセリフは、八年も内科に居る彼女に対して、かなり嫌味が入つていると思つたが、口から出てしまつた以上、とりかえしがつかなかつた。真弓は曖昧な笑みを浮かべると、声のトーンを落として言つた。

「さすがに……『慣れっこ』と言わると傷つくけど」でも……と、

彼女は続けた。「もう治らないとわかつて、それでもつらい治療に堪えている患者さんに対し、美奈ちゃんみたいに心の底から素直に『ガンバレ』なんて、言えないときがあるよ」

美奈子は真弓の顔を、まじまじと見た。

どんなときでも冷静に、努めて明るく。

看護師長のお決まりのセリフが美奈子の頭の中でぐるぐるくる。明るく励ますことは、いけないことなのだろうか？

真弓は母のような笑みを浮かべて、ポンポンと美奈子の背中を叩いた。

「美奈ちゃんは、今までいいんだよ。患者さんが亡くなっちゃうたびに隠れて泣いてる、そんな優しい看護師さんだつて、患者さんにはきっと必要なんだから」

「真弓さん……。知つてたんだ」

美奈子は恥ずかしくなつて俯いた。

「でもね、美奈ちゃん、覚えておいて。患者さんひとつて、生きること自体が地獄の苦しみだつてこともあるんだよ。早く苦しみから解放されたといつて、そう考えている人にとっては、周囲の笑顔が苦痛なときだつてある」

美奈子は自分の顔に手をやつた。真弓の言葉は、深くて重い響きがあつた。

「ある末期ガンの患者さんがね、一回一回しながらこんなことを言つてた。早く死神に会いたいんだよつて」

「死神なんて……」

不吉な言葉に美奈子は眉根を寄せた。真弓はクスッと笑つた。

「私もね、今の美奈ちゃんみたいな顔してたんだと思つ。そしたらその患者さんがね、言つたの。余命二ヶ月と宣告された日に、夢を見たんですつて」

「死神の？」

美奈子の問いに、真弓は頷いた。

「死神が、いつ命をもらいに行けばいいですかって、言つたんだつ

て

「なんか、怖くないね」

「そう。死神はカワイイ女の子だつたんだってさ。患者さんは、『いつでもいいよ』って言ったそうよ。すると女の子は、申し訳なさそうにこう言つたんですつて」

「なんて?」

美奈子は興味をそそられて先を促した。

「予定より早いですが、一ヶ月後の何時何分に伺いますけど、いいですかつて。あんまり詳しい時間を言うものだから、なんだか面白そうだと思った患者さんが、一いつ返事で了承すると、死神がまた遠慮がちにこう言つたの。あまつた残り一ヶ月分の命を、他の人にあげてもいいですかつて」

「はあ?」

なんか、面白いでしょ? と笑つて、真弓はナースステーションに戻つて行つた。

真弓の後姿をぼんやりと見送りながら、美奈子はふと思つた。

本当に、死神の女の子は、一ヶ月後のその時刻に、命をもらひに来たのだろうか……?

午後の回診に同行するためナースステーションを出ると、私服姿の富下が訪ねてきた。

「ごめん、瀬戸さん、忙しかつた?」

美奈子は「大丈夫です」の意味を込めて笑顔を作つた。富下は、昨夜当直だつたと言つてはいたつて。それにしても、本当なら午前中に帰宅してよいはずなのに、もつ午後三時にならうとしている。やはり救命は忙しいみたいだなと思つた。

富下は、これから例の少年の件で警察に行つてみるつもりだと言つた。

「昨日は瀬戸さんに嫌味なこと言つちやつたけど、結局あいつに逃げられたの、僕の責任だから」

相変わらず疲れたような微笑だったが、今朝会つたときよりは色艶が戻つてゐる気がした。

美奈子は帰ろうとする宮下に、真弓から聞いた死神の話をした。

「……だからね、とても苦しい状態の患者さんには、神様がその苦しみから解放してあげようとして、不思議な女の子を使わすんじゃないかつて。そういう話」

真弓の受け売りでそう言つと、宮下は一キビ面をくずして「あはは」と笑つた。

「理沙ちゃんが、怖い死神に連れて行かれたんじゃなくて、よかつた。可愛い女の子だつたら、きっと今頃一緒に遊んでいるのかな」

理沙ちゃんつて言つのか。あのやけどの女の子。

宮下を見送つてから、美奈子は佐藤医師に付いて各病室を回つた。佐藤医師は丁寧に一人ひとりと会話をしながら診察してゆく。それは昨夜見たドラマの話だつたり、世間を震撼させている連續殺人事件のことだつたり、半分以上が雑談だ。彼曰く、この「ミミコニケーション」をとりながらの診察は、とても大事な治療法のひとつなのだそうだが、美奈子にはイマイチよくわからない。けれども、どの患者さんも、佐藤医師の回診を心待ちにしていることだけは間違いないかった。回診は、美奈子にとつても一番楽しみな時間だ。

美奈子は佐藤医師に続いてワゴンをがらがらと押しながら六人部屋に足を踏み入れた。

病人とは思えないほどに元氣のよい挨拶が、あちこちから上がつた。

この六人部屋のメンバーはいいキャラが揃つてゐる。

「先生、尻が痛いんだよ。何とかならんかね」

床ずれが痛いと毎回喚く寝たきりの平助おじいさんがいつもの文句を言つ。佐藤医師は笑顔で対応し、平助おじいさんを横向きに転がすと、寝巻きの裾をめくつた。

「ああ、またいつもとこりだね。床ずれになりかかつて。栄養のバランスが偏つてると治りが遅くなりますから、出された食事

はきちんと食べてくださいね」

「あんな不味いもん、食えるかよ」

美奈子は診察を終えた老人の体位を変換し、下着を整えると、一通りの悪態を聞き流した。隣のベッドに移動して、痰のからみやすい和久さんの喉を吸引し、加湿器をチョックしている間も、平助おじいさんはぶつくさ言つてゐる。

「あー、家に帰りてえなあ」

おととい再手術を受けた患者さんの、尿と腹部の張りを確認していた佐藤医師が、おじいさんの声に思わず苦笑する。

内科病棟は入院期間が長期の人が多い。ときおり一時帰宅を許されるが、この病室では長い人で、もう二年以上も入院している。

美奈子は窓の外に目を向けた。向かいの病棟の窓枠が、初夏の陽を浴びてチカリと光つてゐる。毎日同じ風景を眺めて過ごすのは、どんな気分なのだろうか。

佐藤医師に呼ばれ、美奈子は我に返つた。

「瀬戸さん、例のチェック、頼むよ」

そう言つて、佐藤医師はチラリと小太りの患者さんを見やつた。糖尿の三俣さんの持ち物検査のことだと気付いた。彼はよく目を盗んではカロリーの高いお菓子やつまみを隠し持つていていたりするのだ。先日など、ベッドの中にビールの空き缶を見つけて、美奈子は仰天してしまつた。夜に眠れない小山さんは、今熟睡中だから邪魔しないことにして、一番若いアツシくんのベッドに近づいた。ぐるりと閉められたカーテンをさつと開くと、彼は枕の下に慌てて何かを隠した。

「検温です」と言つて、掛け布団をめぐると、ぱさぱさとヌード雑誌が床に散乱した。

そんなんふうにして一時間ほどかけて、自分の持ち場を回る。残すはあと個室一箇所となつた。フロアの一番奥にあるその個室には、川辺さんのように末期ガンの患者さんが入院してゐる。

美奈子は軽くノックをすると、病室のドアを押し開けた。白い室

内に眩しい陽射しが溢れている。角部屋の個室は、入って正面と左手に一箇所の窓があるので、他の病室よりも明るい。梅雨の晴れ間で青空が覗いている本日は、窓を大きく開け放つと、桜の葉のそよぎが爽やかに聞こえるだろう。美奈子は患者さんに声を掛けてから、ベッドのまわりをぐるりと取り廻んでいる白いカーテンをそっと開けた。患者さんは四十代の男性だ。彼は目を開けると、浮腫んだ顔をこちらに向けた。奥さんの、たつての希望で本人には病気の告知をしていない。

「松谷さん、今日はとてもいい天気ですよ。気温も暖かだから、ちよつと窓を開けてみますね」

美奈子は患者さんに風の当たらない箇所を選んで、窓を細く開けた。淀んだ室内の空気がすうっと表に流れてゆくのがわかる。空気と一緒に、病気も流れで行けばいいのに、そう思った。

「……だつたんですね」

ふいに松谷さんがぼそりと呟いた。聞き取れなくて、急いでそばに歩いて行くと、彼はにこりと笑つて言つた。

「さつきのは、看護師さんだつたんですね。いいですよ、ぼくはもう……。治療費も高いし、妻と子供に負担をかけたくないから……」

「え？」

美奈子は首をかしげた。きっと夢でも見ていたのだろう。痛みを和らげるために、松谷さんの点滴の中にはモルヒネのような成分が入っている。頭が朦朧として、そばに居るもののかを見間違えたり、ふいに意識が途切れたりするのは、よくあることだ。

「もうすぐ面会時間になりますからね。そうそう、この間、上のお嬢さんが私の顔を描いてくれたのよ。本当に上手ですよね」

美奈子はそう言つて、枕もとの壁を見やつた。大きなコルクボードが貼られており、たくさんの写真と「大好きなパパ」とタイトルがつけられた似顔絵が飾られている。松谷さんは満足気にボードを見やると目を閉じた。

容態は安定しているようだが、さつきの発言が少しだけ気になる。

後で佐藤先生に報告しておこづ。

美奈子は検温のページに走り書きをして病室を出た。出た途端に、美奈子の心臓がドクンと鳴つた。

廊下の向こう、二十メートル先に赤いワンピースの後姿があった。短めのスカートからのぞく、細くて長い足がふわふわと軽やかに、床を蹴る。思わず見とれないと、彼女はふわりとスカートを揺らして、風のように階段を駆け下りて行つた。

「あ、待つて！」

女の子を捕まえれば、あの男の子の消息がわかる。美奈子はここが病院の廊下だということを頭の中から追い出して、猛然とダッシュした。足には自信がある。これでも高校のときは陸上部だったのだ。手すりをつかんで階段を一段抜かしで駆け下りる。下のほうから軽やかに走る靴音が響いてきた。きっとあの少女に違いないと確信した。

靴音は、まるでリズムを奏でるように美奈子を誘つ。三階から一階まで一気に駆け下りて廊下を見やると、赤いスカートが残像を残して渡り廊下の方へと曲がつてゆくのが見えた。

美奈子は躊躇わざに追いかけた。渡り廊下の先は本館のロビーだ。午後四時を回った今の時間帯は、外来が終わってメインのガラス扉は鍵が閉まっている。メインの扉の脇に、緊急用の出入り口はあるが、そこには警備員が立っているので、表に出てゆくためには、必ず一旦そこで立ち止まらなくてはならない。

「てゆうか、ロビーの手前で追いつくわ

誘うような足音は、渡り廊下の角の先、いく近いところから聞こえてくる。

あたしの勝ちだ。

なんの勝負かよくわからないが、美奈子はにんまりと笑みを浮かべて、がらんとした本館のロビーに足を踏み入れた。

「え……なんで？」

ロビーは無人だった。美奈子はぺたりと床にはいつくばつて、規

則正しく並んだソファの下を見渡した。ひょっとしたら陰に隠れているかもしないと思ったのだ。でも、少女は見当たらない。まるで煙のよつよつ消えてしまった。

「どこに居るの？」

大きな声で呼んでみたが、その声は広い建物内にわッと広がって、すぐに静けさに飲み込まれた。

ガラス扉の前に立っている警備員の、不審な眼差しと出合つてしまい、美奈子は急いで立ち上がった。

「あの、今ここに赤いワンピースを着た女の子が来たと思つんですけど？」

おずおず尋ねるが、警備員は無表情に首を横に振つただけだった。

床を這いずり回つたので、すっかり白衣が汚れてしまった。美奈子は更衣室で着替えると、持ち場に戻つた。内科病棟の廊下には、大きな配膳台がセットされており、夕食を載せたトレイを運ぶ患者さんや食事介助のヘルパーさんたちが賑やかに行き来していた。

「瀬戸さん、いつたいどこへ行つていたの？」

看護師長に叱られてしまつたが、本当のことなど言ふはずもなく、美奈子はひたすら謝罪した。

「まったく、瀬戸さん。あなたは少し落ち着きがありませんね。さつきもあなたが廊下を走つていたと、患者さんから苦情が来ましたよ。だいたい、あなたは……」

「瀬戸さん、ちょっといいかな」

まだまだ続きそうな看護師長の小言が、男性の声で遮られた。

「佐藤先生！」

楽しい六人が居る病室から顔を出して、佐藤医師が手招きをしていた。美奈子は看護師長に向かつて深く一礼すると、逃げるようになつて佐藤のほうへと走つて行つた。

「瀬戸さんっ！ 走らないの！」

看護師長の声にドキリとしたものの、病室に逃げ込んでしまえば

こちらの勝ちだ。美奈子は転げるようにして六人部屋に入った。

静かにドアを閉めて、振り向いた途端に大爆笑された。

「美奈ちゃん、また怒られてたね」

手術したばかりの沢田さんが、腹を押さえて笑いながら苦しんでいる。笑われるのは不本意だが、一応、看護師長の攻撃から逃れられたから、まあいいか、と美奈子はペロリと舌を出す。すると隣で佐藤医師が声を殺して笑っているのに気付いた。患者さんならいいけれど、自分と四つしか歳の変わらない佐藤医師に笑われるのは、どうにも納得がいかない。美奈子は急に恥ずかしくなってきた。真っ赤な顔を隠すために俯くと、佐藤医師が真面目な顔になつて言つた。

「瀬戸さんを呼んだのは、本当に用事があつたんですよ。この走り書きのことを聞こうと思つて」

何かと思い彼の手元を見ると、検温のシートがあつた。走り書きとは、そのシートに美奈子が書いた末期ガンの松谷さんの言葉だつた。

「ああ……」

美奈子は声のトーンを落とした。

「治療費が高い」「妻と子供に負担をかけたくない」松谷さんが言ったとおり、メモにはそう書かれている。

「そつか……。まいづたな」

「すみません、私、何か余計なこと、したでしようか?」

「いや、そういう意味じゃないよ、『ごめんね。少し考えたい』ことがあるから、失礼するよ」

佐藤医師は頭をかきながら病室を出てゆく。その様子を患者たちが心配そうに見つめているので、美奈子は話題を変えるように大きめの声で言つた。

「あの、ちょっとお聞きしたいんですけど、最近病院で、赤いワンピースの女の子を見かけた方はいらっしゃいませんか?」

「白いワンピースなら田の前にいるけどなあ。あ、でももう、女の

子じゃねえな

平助おじいさんがにやりと笑いながら言ったので、皆が笑った。病室が明るいムードになつたので、そろそろ立ち去ろうとするとき、喉に痰を詰まらせながら、和久さんが美奈子を呼んだ。

「和久さん、どうされました？ 痰をとりますか？」

ベッドの脇に行くと、和久さんは掠れた声で言った。

「見たよ、俺、赤い服の女の子」

「え、どこで？」

「川辺さんと、談話室で話してた」

美奈子は考え込んだ。川辺さんは、もうひと月以上前から寝たきりだ。和久さんはいつたい、いつの話をしているのだらう。

いつ見たのかと尋ねると、彼は桜の頃だと答えた。およそふた月前である。その頃ならば、まだ車椅子で散歩が出来たなど、美奈子は合点がいった。でも、美奈子が聞きたいのは、そんな前の話ではない。

和久さんは美奈子の落胆した表情には気付かず、頷きながら言った。

「そうそう、可愛い子でさ。きっとあれはお孫さんだな」

「へえ、どんな子だい？ うちの孫より可愛いかね？」

隣のベッドから平助おじいさんが尋ねる。

「長い髪で、目の大きな女の子だつた」

和久さんの言葉に、美奈子の心臓が大きく打つた。

「和久さん、あ、ありがとうございます……」

かろうじてそれだけ言って、彼女は病室を後にした。

ドクンドクンドクンドクン

歩くたびに、心臓が暴れ、血液が上昇するように感じる。

赤い女の子と川辺さんは、知り合いだつたのだろうか？ でも、

川辺さんはもうお亡くなりになつてている。それなのに、今日また病院で見かけたのは、いつたいどういうことなのだろう？

和久さんの見た少女と、私の見た少女は同一人物ではないのかも

しない。けど……。それにしては特徴が一致している。これは單なる偶然？　自分は、何か大事なことを見落としているのだろうか。疑問符だけで頭の中が整理できない。

「ああ、わかんない」

美奈子は立ち止まって廊下の窓を見た。紫色に暮れてゆく空は、美奈子をひどく落ち着かない気持ちにさせる。

「こんなときに相談できる彼氏でもいればいいの？」

ぽつりと声に出来て呟くと、頭の中に佐藤医師のとぼけたような顔が浮かんでしまった。美奈子は慌てて佐藤のヴィジョンを頭の中から追い出した。

「いかんいかん、あんな忙しい人は絶対にあたしを不幸にする！」

ナースステーションに戻ると、もう夜勤の引継ぎ時間になつていた。今夜の担当は、ベテランの看護師長と新人のでじぼじコンビだ。小柄な新人ちゃんは、何かへマをやらかしたらしく、看護師長のお小言を喰らつてはいる最中だつた。にもかかわらず、彼女は美奈子を見つけると、「あ！」と言つて、お小言を遮つた。看護師長の目が大きく見開かれる。新人はそのことに全く気付かず、美奈子に駆け寄つてくるとそつと耳打ちした。

「瀬戸さん、さつき彼氏が来ましたよ。紅茶館で待つてゐるからつて」一ヶと白い歯を見せて、彼女は看護師長の元へ帰つて行つた。美奈子は啞然として新人の背中を見つめた。看護師長のお小言を遮るなんて、すごい。すうする。小柄だけど、かなりの大物だと思つた。

それにも、彼氏つて誰だ？ まさか、一年前に別れたアキラくんが来たとか？

仕事を片付けて廊下に出ると、ちゅうど佐藤医師とすれ違つた。彼は両腕一杯に難しそうな本を抱えている。

お先に失礼します、と声をかけると、彼はくるりとロボットのように回れ右をした。そのままつかつかと歩いてくると、こきなり大きめの声で言つた。

「在宅医療について、どう思つ？…」

「へ？」

美奈子は首をかしげた。まったく何の前触れも無しに、いつたい何なのかと、眉をしかめていると、佐藤は言つた。

「他の病院じゃ、もう当たり前だけど、ここではまだ訪問看護の準備がないでしょ？」

「はあ、まあそうですけど……」

「松谷さんを、自宅に帰してあげたらどうかなつて思つんだよね」

「ああ、と美奈子はようやく話の内容が飲み込めた。さつき佐藤医師に松谷さんのメモを渡したからだと気付いた。

「医療費が高いということだから、入院費削減で在宅に切り替えたらいどうだろ。患者さんのもろもろの負担を考えて、自宅でケアできないのかという取り組みが、地域ぐるみで進められているんだよ。特に末期の患者さんは、最期は自宅で家族に看取られたいという希望が多いんだつて。だから、瀬戸さんはどう思つ?」

最期は自宅で、か。

美奈子は病室での松谷さんの様子を思つた。

常に家族のことを気遣う患者さんの顔が浮かぶ。松谷さんの様子を見ていると、とにかく家族を心配させたくない、そういう気持ちを強く感じるのだ。とても痛むはずなのに、面会時間はまったくそんなそぶりを見せないで、家族が帰った後にぐつたりしているのを、美奈子は知つてゐる。そんな彼が、在宅医療をどう思つだらうか? 美奈子がそのことを話すと、佐藤医師はがっかりしたように肩を落とした。

「そつか……。実は、松谷さんのこと也有つて、病院側にも在宅医療の必要性を提案してみようかと思つたんだけどね……。そんなふうに家族でお互いのことを気遣つているのなら、松谷さんに関しては、無理か」

佐藤医師はぽつぽつと頭をかいて、立ち去つた。美奈子は、ふと川辺さんの最期のときの様子を思い出した。

「そうだよね。患者さんは、とても苦しいもんね。苦しくて、どうしようもなくて、必死の形相で迎える最期であつたなら、愛する人には見せたくないよね。特に、一家の主であるお父さんは、そういう姿つて、きっと子供たちには見せたくないんだろうなあ……」

美奈子は急いで着替えると、紅茶館への坂道を降りて行つた。誰だかわからない人物の元へ向かうのは、ちょっと不安だったが、紅茶館なら店長がいるから安心だ。それに、もしも昔の彼氏だったら、

当時手ひどく振られたお返しに、今こそこそばかりの言いたいことを言つてやる。

鼻息も荒く紅茶館に突入した美奈子は、待つていた人物を見て口ケそつになつた。

間接照明の灯された店内、窓際のテーブルに、救命救急の男性看護師・宮下が座つていた。他に客の姿は無い。彼は、ニキビ面にはにかんだ笑みを浮かべて紅茶をすすつていた。なんとなく似合はない。

美奈子は会釈して彼の向かい側に座つた。

「お疲れのところ悪いね、呼び出して。今日、警察へ行つてきたから」「ああ、と彼女は思い出した。救命から脱走した少年の件で、宮下は身元を調べてもらおうと、警察に行つたのだ。

「で、どうでした?」

尋ねると、彼は顔をしかめた。

「名前も住所もわからなかつた」

そつか……と、美奈子が手元のメニューに目を落とすと、彼は言った。

「でも、嫌な情報を耳にした」

「情報つて、なんですか?」

「最近、この辺りで『当たり屋』が居るつて」

「なんですか?」

「車にわざとぶつかつて、その場で金を請求するやつのことだよ」

美奈子が当たり屋を知らないと勘違いしたのか、宮下は丁寧に教えてくれた。

当たり屋といえば、運転中にわざと急ブレーキを踏んで、追突した後続車に法外な請求をするのが常套手段だ。その場合、警察は呼ばずにその場でドライバーに示談を迫る。警察を呼ばないと事故証明がとれないから、保険も降りないし、その後厄介なことになる。

なんだか物騒というよりも、ひどい話だなと思った。だけど、それがいつたいどうしたというのだろうか?

黙つて話を聞いているが、釈然とせぬ様子が見て取れたのだろう。

富下は美奈子に向かつて声をひそめた。

「どうも、その当たり屋つてのが、あの少年みたいなんだよ」

「ええ?」

大きな声が出てしまい、美奈子は思わず口元を押さえた。富下は険しい顔で続ける。

「主婦の運転する軽自動車を選んで飛び出しほは、治療費をその場でもらつている男の子が居るんだつて。ハッキリ断定は出来ないが、背格好も彼によく似ているみたいなんだ」

「……まさか、そんなことつて!」

美奈子の頭では、当たり屋とは車同士の設定だ。人対車でそんなことをしていて、大ケガしたらどうするのだ。ケガで済めばいいが、当たり所が悪ければ死んでしまう。

客が居なくてヒマのだろう。店長がカウンターから出てきて話に加わつた。

「おいおい、それ本当かい?」

富下は頷くと言つた。

「子供だから、考えもなしにやつてるんでしょう。信じられないけど、ホントみたいだよ」

美奈子と店長は顔を見合させた。なんてムチャなことをするのだろう。そんなことを繰り返していくと、いつか取り返しがつかないことになる。

「警察のほうに、少年をはねたドライバーから数件の問い合わせがあつて、探してゐつて言つてた。みんな心配していて、治療費を払いたいそうだ」

富下はそう言つて、ため息をついた。美奈子は眉根を寄せて言った。

「バカね、その子。例えわざと飛び出したつて、人対車なら、車のほうが悪いんだから、きちんと名乗つて堂々と治療費請求したらいのに」

紅茶館の店内に、沈黙が降りてくる。何だか信じられない話だった。

「まさか、次また運ばれてくるようなことは無いと信じたいけど、もし来たら、すぐ警察に知らせよ。瀬戸さんも、彼のことで何かわかつたらそうしてくれないかな」

富下の言葉に、美奈子は頷いてぼそりと呟いた。

「親や、周りの大人はどうなつているのかしら」

すると店長が寂しげに言つた。

「見て見ぬふりか、あるいは親がやらせていたりして……」

美奈子は「まさか」というように店長を見つめた。命に触れる職場にいるものにとつて、お金のために、そんなふうに自分を傷つける少年のやりかたは許せない。ましてや、親公認など、ありえない。「お金と命と、どっちが大事かなんて、誰にだつてわかるのに」腹が立つと同時に、胸の奥がひびく寒くなつた。

憂鬱な気分で紅茶館を出ると、富下がついてきた。

「あの、富下さん、看護師寮はすぐそこですから、送つていただかなくとも大丈夫ですよ」

すると彼は慌てたように言つた。

「あ、いや。ぼく、職場に……。気になる患者さんが居るので、ちよつとそちらを見てから帰りますから」

病院は闇の中に白い外壁を浮かび上がらせていた。普段はタクシーや待機している正面玄関は、明かりが消えて真っ暗だ。坂道を登りきつて、建物全体が見えると、左端の奥にある救命救急センターの灯りが眩しく見えた。

じゃあ、と手をあげた富下を見送つては、救命の灯りの中に赤いワンピースの少女を見つけた。美奈子は声をひそめて富下を呼び止めた。

「富下さん、あの子。逃げた少年の友だちよ」

少女はしばらく救命の搬送口付近をウロウロしていたが、やがて

建物の中に消えた。

二人は闇の中を走つて行つた。走りながら、美奈子の心臓がドクンと跳ねた。少女が、また先日みたいに、跡形もなく消えていたらと思つと妙に背筋が寒い。搬送口の灯りに向かつて走りながら、奇妙な妄想が美奈子の脳裏をよぎる。

瀕死の病人のそばに、ひつそりと佇む赤い服の美少女。彼女の唇に笑みが形作られ、甘い言葉が囁かれる。

痛みも苦しみもない世界へ、行きたいでしょう？

弱々しくうなずく患者の顔が、いつの間にか亡くなつた川辺老婦人になつてゐる。

じゃあ、今すぐ連れてゆくかわりに、残り一か月分の命をちようだい……。どうせ死ぬんだから、同じことでしょう？
美奈子はあらぬ妄想を必死で打ち消した。死神少女なんて居るはずがない。

息を切らして救命の入口に駆け込むと、意外にも少女はそこに居た。振り向いた彼女は、大きな目を見開いて固まつてゐる。

「ここで何してるの？」

少年のこと、思うどきうがあるのでどうか。富下がちょっと厳しい声を出した。

少女は泣きそうな表情になり、美奈子の顔をじっと見上げた。

「あ……もしかして、彼氏がまた連ばれてきた、とか？」

チラリと横目で処置室のほうを見て尋ねると、少女は違うといふように首を左右に振つた。

「ここは緊急の患者さんを運び込む場所だから、用のない人は入っちゃいけないんだよ」

美奈子がなるべく優しい声で諭すと、彼女は俯いて、消え入るよつな声で言つた。

「……カイを、見てやつてもらえませんか？」

「カイって、この間の男の子？」

美奈子は近づいて、少女の腕を捕まえた。ビクと震えた腕は、細

くてひんやりしている。

少女はつかまれた腕に目を落としながらじりじりと逡巡していたが、やがてはつきりと言った。

「看護師さんですよね。お願ひします、ちょっとでいいからカイを見てもらえませんか？ 今朝から、様子がおかしいんです」

「おかしいって、どんな？」

少女は腕を捕らえた美奈子の手首をもう一方の手でぎゅっとつかまると、表に向かつて走り出した。

「ちょっと、待って！」

ミュールを履いた足がもつれそうになつた。背後にいた富下が、慌てて支えてくれたので、間一髪転ばずに済んだ。富下は少女を怒鳴りつけた。

「待てって、言つてんだろ！ 危ないじゃないか！」

彼の声に驚いた少女は、飛び上がりて振り向いた。目に涙をいっぱい溜めている。

「あ、ごめ……なさい。あの、お願ひします。カイが、死んじやう」

「わかつたから。どこに行けばいいのよ」

美奈子は背後の富下に田配せした。彼も察したらしく頷く。これで少年の身元がわかる。

二人は少女に連れられて、今帰つてきたばかりの坂道を下つていつた。

三十分ほど歩いたどうつか。シャッターの下りた下町風の商店街を抜けると、高速道路の高架下に出た。

「このへんつて、浮浪者が多いんだよな」

富下が顔をしかめた。さつきから下水の臭いがするのだ。

少女は高架下をぐぐつてすぐのところにある、小さなカラオケスナックとシャッターの下りた弁当屋の間の路地に入つて行つた。

体を傾けるようにして進むと、まるで梯子のように急な角度の鉄階段が前方を塞いでいる。少女はするすると音も立てずに上つてゆく。美奈子は背後の富下を振り返つた。

「あ、大丈夫だから。且、つぶつてるから」

美奈子のスカートをチラリと見やつて、富下が真っ赤になる。美奈子は牽制の意味で富下をひと睨みすると、ミュールを脱いで裸足で階段を上がった。

どうやらカラオケスナックのある建物の屋根裏らしいと気付く。無理矢理つけたようなドアから入ると、下手くそな男性の歌声がガングン響いていた。

少女がスイッチを入れると、古い電気が点灯した。裸電球ではなかつたが、小さな傘がついた照明は、物置の電気に似ている。実際、物置として使われているのだろう。天井の低い八畳ほどのスペースは、コンクリート打ちっぱなしで、隅の方に酒瓶のケースや灯油のポリタンクなどが乱雑に置かれていた。その一画に安物のカーペットが敷かれ、スチール製のベッドが一台置かれている。少年はそこで体をエビのように丸めて横たわっていた。下水の臭いがこの室内にもこもっているようだった。

辺りを見回していると、鼻の頭にシワを寄せた富下がようやく室内に入ってきた。

少女が駆け寄つて、少年の耳に何かを囁いた。途端に彼は勢い良く身を起こして少女を突き飛ばした。少女はベッドサイドに尻餅をついた。黄色い灯りの中に、ホコリがぶわっと舞い上がる。

少年は、聞きなれない言葉で少女を怒鳴りつけた。少女の顔が可哀想なくらいに蒼ざめてゆく。さらに罵る少年を見て、美奈子はハツとした。

照明のせいだけではなく、彼の顔色はとても悪かった。少年は美奈子と富下を見て、口をぱくぱくさせたが、苦痛に顔をゆがめると再び倒れるようにして横たわった。

床にぺたりと座り込んだまま、少女が喚く。

「カイのバカ！ 今、看護師さんたちに見てもらわないと、死んじゃうよ！ おなかの中、ぐちゃぐちゃになつて、死んじゃうんだよ」美奈子は少女のそばに行って、彼女を助け起こした。富下は一人

にうなずくと少年の傍らに行つて毛布をめくつた。少年が呻く。
下血があつたようで、少年のグレーのスウェットパンツとシャツ
がどす黒くなつてゐる。

「やっぱ、内臓の傷口が開いたんだな。下手したら癒着をおこして
るかも。感染症も氣になる」

救命の看護師で、オペにも入つてゐるので、宮下はずいぶんと詳
しかつた。

「一刻も早く病院に連れて行つてみてもらわないと、本当に命にか
かわるぞ」

少女の大きな目から、ぼろぼろと涙がこぼれた。救急車を呼ぼう
と携帯を取り出した宮下のズボンを、少年がむんずとつかんだ。

「ダメ……。病院も、警察もダメだ」

「何言つてんだよ。死にたいのか？」

「金がない」

「そんなこと、言つてる場合か！」

「オレが入院したら、ヒエンが一人に……」

「じぶつと小さく血液の塊を吐くと、少年は動かなくなつた。

「いやああああああ！」

ヒエンと呼ばれた少女が悲鳴のような声を上げた。宮下は少女を
手で制し、小さく頷いた。

「氣を失つただけだ。大丈夫だから」

ほどなくして到着した救急車に乗せられた少年を見て、ヒエンは
大きく安堵のため息を漏らした。美奈子は少年の顔を覗き込んだ。
救急車の狭いベッドに括りつけられたカイは、ぐつたりしてゐる。
「心配いらないよ。あなたが退院するまで、この子は私が面倒見る

から

意識のない彼の口元に、笑みが浮かんだように見えたのは氣のせ
いだろうか？

付き添いで宮下だけが救急車に乗り込んだ。彼は、救急隊員に市

立総合病院へ運ぶようにと告げた。美奈子はヒエンと共に、タクシーを拾つて後から追いかけた。

タクシーの後部シートに崩れるように座つているヒエンに、美奈子は声をかけた。

「ねえ、どうして彼はあんなムチャなこと、しているの？」

ヒエンはぽつりと言つた。

「お金がないからです」

「だからつて、あんなこと……。死ぬようなマネができるんだつたら、死ぬ氣で働けば何とかなるでしょ？」

ヒエンは悲しそうな目で美奈子を見つめた。

「働くところが、ないです。外国人は、見つかると日本に居られなくなるつて、カイが言います」

「でも……。親……保護者とか、誰か大人の知り合いは居ないの？」

美奈子の問には答えず、ヒエンはタクシーの車窓から夜の街を眺めた。言いたくないのかもしれない。悪いことを聞いてしまったなど、少々反省していると、ヒエンが口を開いた。

「カイが私の親で、兄だと思つてます。私は気付いたらカイと一緒に暮らしていました。大人の人たちと同居していた時期もあつたけど、どれも長くは続かなくて、結局私とカイはいつも一人でした」少女の細い肩先が不安げに震えていた。美奈子は果てしなく落ち込んでいた。自分の理解を遥かに超えた世界が、こんなにも間近にあつたということに、ショックを隠せない。医者や看護師では治せない、現代社会の闇を見たような気がする。

「ねえ、ひとつだけ、教えてくれないかな」

美奈子はヒエンの瞳を見つめて問いかけた。

「どうして、事故のときに現場を離れたの？」カイがのたうちまわつているのに、どうして？」

ヒエンは長い睫毛をそつと伏せた。

「カイがそうしろと、いつも言つから。万が一、相手が警察を呼ん

だ場合、私が捕まらないようにするためだそうです」

伏せた睫毛の先から透明な涙があふれ、少女のなめらかな頬を伝う。

「カイは悪くないです。お金はもらつたものです。私たちは悪いことはしていません」

「でも……」

でかかつた言葉を美奈子は飲み込んだ。

不法滞在。たぶん、そうなのだろう。それは、明らかに違法だ。

「悪いことしてないのに、なぜ警察を避けるの？」

意地の悪い言い方だと思ったが、きちんと教えてやつたほうが多いと思い、美奈子はヒエンの顔を覗き込む。少女はうつむいたまま小さな声で言った。

「警察は私たちを捕まえます。それは、私たちがどこにも存在しない人間だから。私たちは、ゴーストなんです。ゴーストは嫌われる。警察以外の人は、私たちがまるで存在しないかのように、通り過ぎてゆきます。私たちには祖国もなく、親もなく、……希望もない。ただ、毎日を生きるだけなんです」

タクシーが市立総合病院に到着した。救急車はまだ搬送口に駐車していたが、カイと富下の姿はなかつた。

救命センターの中に入ると、背の高い救命医がブルーの手術着を身につけてオペ室に消えたところだつた。

美奈子は廊下の片隅にあるソファにヒエンを座らせた。彼女は両手を膝の上で組み合わせて、じつと俯いている。

尋ねたいことがたくさんあつたが、とても話しかけられる雰囲気ではなかつた。

三十分ほど経過したころ、ふいにヒエンが呟いた。

「死神は、いらない命をもらいに来るんだつて」

美奈子はどきりとして隣に座る少女を見つめた。

「死神つて、何の話？」

ヒエンは膝の上で組んでいた手をほどくと、自分の田元をこすつた。彼女は思い出すかのように虚空を見つめて言った。

「前に一度カイがこちらに運ばれたとき、病棟で会ったお婆さんが言つてたの。死にたくない人間もいるけど、逆に死にたい人間もいるんだよって。そういう人はお願いすると、死神の女の子が命を早めにもらいに来るの。それで、残りの命を、死にたくない人間に分けてあげるんだって」

美奈子の脳裏に、優しい老婦人の顔がクローズアップされる。しわがれた声が頭の中に響いた。

この小娘は……。遅い、何故もつと早く来なかつたんだい。パズルピースがはまつたように、美奈子の中で、カチリと音をたてて何かがつながつた。

川辺さんは、死神の女の子を待つていたのだろうか。

「……バカなカイ。オレはいつ死んでもいい、なんて言つから、死神が勘違いしたんだよ」

少女は鼻をすすつた。小さな花のよつた唇から、切ないささやきが漏れる。

「死神さん、お願ひ。カイにいらない命を分けてあげてください。カイは、本当は死にたくないんですね……。お願ひ……」

少女の肩をそつと抱き寄せて、美奈子も生まれて初めて死神に祈つた。

この世に、いらぬ命といつものがあるのなら、どうかあの少年に……。

梅雨が明け、連日猛暑が続いている。当たり屋の少年・カイは一命を取り留めて、美奈子の勤務する内科病棟に移された。

美奈子が病室に顔を出すと、彼は笑顔で話しかけてくるようになつた。検温を済ませて病室を出た美奈子を、カイが点滴スタンドを引きずりながら追いかけてきた。

「あの……ヒエンは、元気にしてる？」

「大丈夫よ。昨日会つたけど、元気そうだったよ」

カイは安心したように大きく頷いた。ヒエンは今、隣町の児童養護施設で暮らしている。

「あさつて、お見舞いに来るそつだから、なにか欲しいものがあつたら、連絡してあげるけど？」

彼は要らないといつぶつに、首を横に振つた。やはり、お金のことが心配なのだろう。でも、こればかりはどうすることも出来ない。宮下の話では、彼らの親は不法滞在で本国に強制送還されてしまつたらしい。別れるのはつらいけれど、日本に残してやつたほうが、カイたちにとつて幸せだとでも考えたのだろうか？ いくら考えても、結局他人の事情はわからないのだけれど。

カイの体調が戻つたら、二人は親元へ強制送還されることが決まつてゐる。

「ほら、ベッドに戻つて。また出血したら大変よ」

美奈子は追い立てるようにして彼をベッドに戻らせた。

腕時計に目をやり、慌ててナースステーションに駆け込むと、看護師長に叱られた。

「瀬戸さんつ！ 走らないの。何度言つたらわかるの？」

「あ、でも、これから訪問看護の当番なんですよ」

「え、まあ！ 大変。早く仕度しなさい。まったくあなたは、どうしてこう慌ただしいのかしら」

いつものお小言をやりすゞし、美奈子は医療キッドの入つた大きな黒いバッグを提げて、駐車場に向かつた。

空調の効いた建物から一步出た瞬間に、くらりとする。眩い夏の陽射しが照りつける駐車場で、佐藤医師が待つていた。彼の横には、『市立総合病院訪問看護サービスカー』と書かれた軽自動車が停まつていた。

「瀬戸さん、五分の遅刻」

「すみません、先生」

佐藤はふつとため息をついて、白衣姿のまま運転席に乗り込んだ。シートベルトを締める美奈子に、佐藤がぶつくさ文句を言つ。

「まったく、市立総合病院の記念すべき第一回訪問看護だつていうのに、遅刻かよ。先が思いやられるな」

ちらりと横目で見ると、佐藤の目が笑つていたので、美奈子は言い訳せずにぺろりと舌を出すだけに留めた。機嫌は悪くないらしい。以前、末期がん患者の松谷さんのコメントを読んだ佐藤医師が、末期の在宅医療を提案し、即採用されたのだ。

最期のときは、自分の家で家族に見守られながら……と願つてゐる患者さんはやはり多い。それに、入院費の心配をしながらでは、なかなか治療自体に対して積極的になれないこともあります。訪問看護の導入を、佐藤医師が中心となつて、強く病院に交渉したらしいと聞いている。

ハンドルを握りながら佐藤医師が言った。

「もつと前から計画だけはあつたみたいなんだけどね、看護師と医師の体制ができていなかつたんだ。まあ、今もボランティアみたいなもんだけどね」

訪問看護に携わる看護師や医師は、病院内で立候補が採られた。その結果、医師は四人、看護師は七人しか集まらなかつたのだ。スタッフを訪問看護に出すほうの係も、人員が不足していく厳しいというのがその理由だつた。

内科からは、佐藤医師ともう一人、研修医の先生がメンバーになつており、看護師は美奈子と例の大物新人ちゃんだつた。彼女の言い分が、またすぐすぎたから、先日ひと波乱が巻き起こつた。

「研修医の鳴沢先生つて、超美少年系だし、佐藤先生は癒し系でしょう？　どっちにするのか選ぶなら、もつと仲良くならないとね」

なんて不純な動機なのがと、看護師長がキレそうになつたのは言うまでもない。余談だが、救命の宮下看護師も、訪問看護のメンバーに立候補したと聞いている。しかし、彼は救命スタッフから猛反対をくらつてしまつたらしい。美奈子はそれを聞いてもつともだと

思つた。気持ちは嬉しいが、救命はただでさえ忙しいのに、そんなことをしたら彼の体が持たないだろ。

佐藤医師の運転する車は閑静な住宅街に入った。これからトップで訪問するのは、松谷さんのお宅だ。

彼にはまだ告知はしていない。けれど、入院費のことが気になつていたようだつたので、美奈子が試しに在宅看護の話をしたところ、二つ返事で了承し、昨日退院したのだ。

庭先で洗濯物を干していた奥さんが、にこやかに出迎えてくれた。一階の入口に近い部屋に、松谷さんは居た。

清潔な室内は、とても口当たりが好くて居心地が良さそうだ。窓際にたくさんの観葉植物が置かれており、天井からは子供たちの作った折り鶴が下がつていた。

「妻が、電動式のベッドを手配してくれたんですよ。レンタルでこんな立派なものがあるなんて、知りませんでした」

佐藤医師はにっこりして言った。

「本当だ。じりや、病院のベッドなんかより、百倍寝心地が良さそうだ

うだ

診察を終えて玄関を出ると、奥さんが追いかけてきた。何事かと振り返ると、冷たい缶コーヒーを一本差し出された。

「先生、看護師さん、ありがとうございます。昨夜、主人とゆっくり話しました。結婚して以来、あんなに真剣に心の内を見せ合つたのは初めてでした」

よかつたですね、と美奈子が言つて、奥さんはペコリと頭を下げて言つた。

「……あの人、自分の病気、正確に知つてたんですね

「え？」

やつぱり、と真っ赤で佐藤が美奈子のほうをチラリと見た。美奈子はブルブルと小刻みに首を振つた。どんなことがあつたつて、患者さんの前で病名を言つたりはしていない。

奥さんはその様子に「違うんです」と言つた。

「彼、インターネットを使って自分で調べたんですって。点滴に使われている薬品とか、自分の自覚症状とかで、素人でもわかるみたいですね」

二人は黙り込んだ。奥さんは美奈子の手にひんやりした缶を握らせると、やわらかく微笑んだ。

「私たちは大丈夫です。こうして、先生たちのおかげで、家族の時間が持てたのですから。これから的时间を毎一杯、家族で大切に過ごします」

車に戻ると、二人は冷えた缶コーヒーを一気に飲んだ。ほろ苦い味が広がって、胸がじんとした。

佐藤医師は車を発進させると、ちよつと寄りたいといふがある、と言つた。

美奈子は無言で頷いて、助手席の窓から外へと目を向けた。ガードレールに沿つて、真っ赤なカンナの花が延々と続いている。まるで、ヒエンのスカートみたいだと思った。

あの日、松谷さんの病室から出たときに見た後姿は、果たしてヒエンだったのだろうか？ ロビーで忽然と姿を消した少女は、本物の死神だったのかもしれない。もしもあのまま松谷さんが生きるのをあきらめてしまつたら、きっと彼女はその先のいらない命をもらいに来ていたのかもしれない。訪問看護によつて、ちよつぴり生きる希望を取り戻してくれた松谷さんには、もう死神少女は近づかないだろう。

物思いに耽つていると、車が止まつた。立派な日本家屋が目の前にある。緑濃い生垣から覗いた瓦屋根が、夏の陽を浴びて艶めいて見えた。

「瀬戸さんも、一緒に来る？」

美奈子は助手席から乗り出すようにして表札を見た。『川辺』と書かれているのを見て、彼女は気付いた。

「ここって、あの、川辺さんの？」

佐藤医師は頷くと言つた。

「一度、お線香をあげたいなと思つていたから」

美奈子も頷き返して車を降りた。あの夜の、苦い思いが込み上げる。何度経験しても、慣れることのない臨終の場面。美奈子は隣に立つて呼び鈴を鳴らす佐藤医師を盗み見た。彼の心の器には、自分よりも、きっと、ずっと多くの思いがしまいこまれているのだろう。立派な門構えの引き戸を開けると、犬の鳴き声と共に川辺さんの息子さんが姿を見せた。

佐藤医師が挨拶すると、息子さんは笑顔を見せて、すぐに一人を仏間に案内してくれた。

仏壇の前で手を合わせ、美奈子は遺影を見上げた。写真の中の川辺さんは、桜を見たころの穏やかな表情で微笑んでいた。

次の患者さん宅へ向かうため、いとまじいすると、少々お待ちください、と言つて、息子さんが風呂敷に包まれたものを持ってきた。「これは、母の遺品なんですが、『看護婦さんへ』つていう手紙が添えてあつたので、母の担当だった方にお渡しいただけないでしょうか」

佐藤医師に促されて、美奈子は包みを受け取つた。

「あの、ちょっと中を拝見してもよろしいですか？」

高価な物だつたら困ると思い、美奈子は了解を得てから包みを解いた。中から白い封筒に入つた手紙と、一冊の絵本が出てきた。絵本の表紙には、可愛らしい女の子が描かれている。手にとつて開こうとすると、息子さんが言つた。

「実は、これ、母が書いた童話なんですよ」

「え？ 川辺さんは、作家さんだつたんですか？」

目を丸くする美奈子に、息子さんは「違いますよ」と、手をあげた。

「母は小学校の教員でした。この絵本も、何年か前に、クラスの生徒さんのために書いたらしくです。自費出版つてやつですよ」

「へえ、とても教育熱心な方だつたんですね」

佐藤が言つと、息子さんは曖昧に笑つて言つた。

「実は、母のクラスの生徒さんが突然お亡くなりになつて、そのときに書いたみたいです。ぼくは良く事情を知らないんですけれどね」美奈子と佐藤は目を見合わせたが、とりあえず絵本をいただいて帰ることにした。

「そうですか。じゃあ、遠慮なくいただきます。入院している子供たちに見せてあげよう」

美奈子と佐藤医師は川辺さん宅を辞した。

車の中で、美奈子は封筒を手に取つた。

「困りましたね、先生。『看護婦さんへ』って言つても、誰宛てなのか、わかりませんよ」

「看護師たち全員へのお礼か何かの手紙じゃないのかな。俺も大学病院時代に、よく『先生へ』っていう手紙、子供からもらつたよ」佐藤医師はたいして氣にも留めない。

「でも、仮にも元教師ですよ？ 確かに私たちつて、あまり名前で呼ばれたりしないけど、こんな宛名つて……」

「でもさあ、担当だったのつて、瀬戸さんが真弓さんなんぢゃないの？ それなら、一人で開けて読んでみなよ」

「う……苦情だつたらどうしよう」

氣分が良いときはにこやかだつたが、川辺老婦人はけつこうつ氣難しいところがあつたのも確かだ。

「後で何が書いてあつたのか、教えてね」

にやりと笑つて、佐藤がトドメを刺す。美奈子は手紙と絵本を元通りに包み直した。

昼の休憩時間になると、美奈子は真弓を誘つて屋上へ向かつた。万が一、苦情だつたりしたら、他の看護師たちにはあまり知られたくない。

二人で足早に階段を上がり、屋上への鉄扉を押し開けた。

「うわあ、いい天氣」

真弓が歓声を上げた。真つ青な空が、迫つてくるようだ。二人は何台も並んでいるエアコンの室外機の脇を通り抜けて、色の剥げ落ちたベンチに座った。

美奈子が包みを解いて封筒を抜き出すと、真弓が「ぐりと睡を呑み込んだ。

「手紙、何て書いてあるんだろうね。ちょっとドキドキする」

真つ白な便箋を開くと、美しいペン字が目に飛び込んで来た。二

人は、顔をくつつけ合うようにして、文章に目を走らせた。

看護婦さんへ

これを読まれるときには、私はもう死んで肉のかたまりとなつていることでしょう。

最期のときに、自分の口から直接お礼を言いたいと思つておりますが、きっとその場になつたら、自分の意思は保てないのでないかと懸念し、こうして文章にしたためておきます。

余命いくばくもなく、ただ死に逝くのみとなり、生死について考えました。

理想では、残り少ない日々を出来るだけ穏やかに笑顔で、いままでお世話になつた人たちへの感謝の気持ちだけを胸に、最期まで精一杯生きてゆこう、そんなふうに決めていました。でも、実際に病の苦痛に襲われたときは、早く死んでしまいたい。この苦しみから逃れられるのならば、今すぐ悪魔に命をくれてやつてもいいと思う自分が居ることも否定できません。

そんな暗い気分のときには、一生懸命看護してくださるあなたの笑顔さえも、受け付けることができない。せつかく差し延べてくれた介抱の手を、振り払つてしまつたこともありましたね。許してください。

私は教師として何百人の生徒を教え、導いてきました。生徒たちに、えらなことをたくさん言いました。生について、死について、多くを語りました。人生の終焉を迎えるにあたつて、私なり

の幕引きを思い描いたりもしました。けれども、そんなものは何の役にも立たない。私の思いは落ち着きなく日々揺れ続けていました。あなたの笑顔に励ましたときには、もつともつと長く生きたいと思、病の痛みに苦しめられたときは、早く死んだらもうあなたの眩しい笑顔を見なくて済むのだと。

それでもやつぱり、最後には生きたい。生きていて、笑顔に見守られていたい、そう思うのでしううね。

とりとめのないことばかりですみません。

末筆になりますが、看護婦さん、ありがとうございます。あなたと一緒に見た、最期の桜を忘れません。

川辺しづ子

便箋に、どちらのものともわからぬ涙がはたりとこぼれ落ち、インクの染みが広がった。

桜を見上げて微笑む老婦人の顔が、美奈子の脳裏に鮮明に甦つて来た。

隣で鼻をすすりながら、真弓が妙に明るい声で言った。

「なんか、最後でちょっと拍子抜けしちゃったな。私、川辺さんと桜を見てないもの。これって、きっと美奈ちゃんへの手紙だよね」美奈子も慌てて目元をぬぐうと、手紙をかさかさと折りたたんだ。川辺さんの手紙はとても嬉しかったが、真弓に悪いことをしてしまつたかな、という気もしていた。美奈子はわざとふざけたように言った。

「実はさあ、川辺さんの最期の言葉があまりに不気味で、ずっと心が重かつたんだよね。今、この手紙を読んでようやく気持ちが軽くなつた気がするよ」

「ええ? 川辺さん、最期になんておつしゃつたの?」

美奈子は真弓に老婦人の言葉をそのまま伝えた。

「この小娘は……。遅い、何故もつと早く来なかつたんだい。まったく、本当に……なんて役立たずな子……。」

「それはきっと美奈ちゃんのことだよ」などと、からかわれるかと

思つたが、真弓は眞面目な顔つきで美奈子の手元の包みを見つめている。

「真弓さん……どうかした？」

「真弓は、美奈子の手から風呂敷包みを取り上げた。

「あの話ね、実は川辺さんから聞いたんだよ」

美奈子は首をかしげた。あの話って、なんだらう？

「真弓は包みの中から絵本を取り出して、膝に乗せた。

「死神の女の子の話、あれ、いつか川辺さんが話してくれたのよ」

美奈子は真弓の膝に乗せられた絵本を見て、あつと声を上げた。

『『いらない命』』といつタイトルだった。

『『いらない命』』

暑い夏が遠ざかり、入れ替わりに秋がやつてきました。秋は澄んだ空と爽やかな風をお供に連れています。

風が森を通り抜けたとき、木の幹からぽとりと蝉が落ちました。風は言いました。

「もう夏は行つてしまつたよ」

蝉は仰向けになつたまま、六本の足を弱々しく動かしました。そこへひとりの少女がやつてきました。少女は地面に落ちた蝉を手のひらに乗せて言いました。

「蝉さん、もう、死んじやうね」

蝉は頷きました。

「秋が來たんだ。私の命はあと半日もないよ」

「じゃあ、その半日を私にかけつだい」

「どうせ死ぬんだ、いいよ」

蝉は死にました。死んだ蝉は、少女の手のひらで、一粒の薬になりました。

道端で、車にはねられた野良猫が息絶えようとしていました。

猫は痛みに顔をしかめながら咳きました。

「私のお腹には赤ちゃんがいるの。どうか後もう少しだけ生かしてください」

そこにさつきの少女が通りかかりました。少女はポケットから一粒の薬を取り出して言いました。

「猫さんに、半日ぶんの命をあげる。そのかわり、もし余ったぶんがあれば、わたしに返してくれる？」

猫はうなずくと、薬を受け取つてにっこりしました。

薬を飲んだ猫は、半日たたずに三四の仔猫を産みました。元気な子供たちの様子を見届けた母猫は、少女に向かって言いました。

「私はもう助かりません。子供の無事も見届けました。残りの命はあとわずかですが、お約束を守ります」

猫は死んで、少女の手のひらにまた一粒の薬が残りました。

秋が駆け足で通り過ぎ、やがて冬がやつてきました。

少女はたくさんのお会いと別れを経験しました。死にゆく者たちから、残りの命をもらい集めるのが、少女の望みだったのです。

少女は病院の前に立っていました。

この病院には、少女の大切なお友だちが入院しています。

お友だちは、とても重い病気にかかっていました。春が来るまでに死んでしまうと、お医者さまから言われているのです。

少女はどうしてもお友だちを助けたいと思いました。だから少女はお友だちのために、半年かかつて命の薬を集めました。

お友だちは、少女の顔を見ると、うれし涙を流しました。

「どこに行つていたの？ とても会いたかった」

「あなたが長く生きられるよう、いらない命をもらつて歩いていたの」

そういうて、少女は小瓶に詰めたキラキラ光る薬の粒を見せました。

「これだけで、あと半年は生きられるよ。よかつたね」

笑顔を向けた少女に、お友だちは寂しそうな顔で言いました。

「それでも、半年したら、わたしは死んでしまうのでしょうか？」

「大丈夫よ、それまでにまた半年かけて、私が薬を集めてくれるから」

お友だちは悲しい目で少女を見て言いました。

「ねえ、あなたの手元の美しいもの。それは本当に、いらない命なのかしら？」

翌朝、お友だちは一粒の輝く薬になっていました。自分で自分の命を絶つたのです。

少女は薬の粒をそつと拾つて小瓶の中に入れました。

涙があふれてきて止まりませんでした。いつたい自分は何のために旅をしてきたのか、わからなくなってしまいました。

なぜ、お友だちは薬を飲まなかつたのでしょうか？ 少女は小瓶の中の輝きに向かつて叫びました。

「飲めばよかつたのよ。生きていたいって、言つたじやない。満開の桜が見たいって、言つたじやない！」

空のベッドに突つ伏して、少女は泣きじやくります。

「飲めばよかつたのよ。だつてこれは、いらない命のかたまりなんだよ？ 大事なものを、簡単に人にあげてしまうわけが、ないじやない。ねえ、そう思わない？ みんな、いらないからくれたんじやないの？ これは、いらない命なんじやないの？」

「じゃあ、私の命も、いらない命なのかしら？」

少女はハツとして、小瓶の中を覗きこみました。透明なガラスの中で、光の粒たちがまるで星のように明滅していました。

「じゃあ、この粒は、いったい何なの？ 何のために、あるの？」

答えを見つけるために、少女はまた旅に出ました。小さな胸に、たくさんの光の粒を抱えて。

おしまい

美奈子はかぶっていたナースキャップをとると、泣き顔を隠すようになり元に当たた。

「きっと、川辺さんは、この少女が現れるのを待っていたんだよ」「真弓の言葉に、美奈子は何度も頷いた。川辺さんは、自分の生み出した少女に、精一杯の愛情を込めて「小娘」と呼んだのだろう。「そうだ、美奈ちゃん知つてた?」

「なに?」

「川辺さん、ご自分の遺体を検体としてU大学附属病院に提供したんだって」

「え?」

医学のために、自分の体を差し出すのは、医療現場に居るものでさえ、なかなか出来ることではない。切り刻まれて、ばらばらになつてしまふかもしれないといって、なかなか家族の理解を得られないのだと聞いたことがある。

「あ、だから、肉のかたまりって書いてあつたんだ!」

美奈子は手紙の冒頭を読み返した。止まっていた涙が再び溢れてきた。

美奈子は手紙と絵本をぎゅうと胸に抱きしめた。

この本の中の一人の少女は、きっとどちらも川辺さん自身だったのかもしれない。

「ねえ、真弓さん。前に、真弓さんが私に言つたこと、覚えてますか?」

うん、と真弓は頷いた。

つらい治療に堪えている患者さんに対し、美奈ちゃんみたいに心の底から素直に『ガンバレ』なんて、言えないときがあるよ

「私、あのときはわからなかつたけれど、今ならその意味がわかります。でも……」

美奈子は絵本の包みを抱きしめたまま、懸命に笑顔を作った。

「でも、私はやっぱり応援したい。最期まで、命をあきらめないでと言い続けます。だつて私は、死神少女じゃないから」

真弓がクスッと笑つて、美奈子の手からシワになつたナースキャップを取り上げた。丁寧に形を整えると、真弓は美奈子の頭をくしやりとひと撫でしてから、キャップを留めつけた。

「これからも、命に対しても様々な考え方に出逢うでしょう。でも、私たちは看護師であることを忘れてはいけないよね」

「うん。それに、この世に『いらない命』なんて、絶対に無いんだから」

湿つた風が、一人の白衣をふわりと撫でた。空を振り仰ぐと、さつきまで雲ひとつなかつた夏空に、積乱雲がもじもじと集まつていた。

ふと耳を澄ますと、下界から救急車のサイレンが聞こえてきて、一人ははじかれたようにベンチから立ち上がつた。

「さあ、美奈ちゃん。仕事しなくちゃ」

「そうですね、先輩。患者さんが待つて」

一人はサンダルの音を残して、慌ただしく屋上から出て行つた。

了

第三話 命といつむの（後書き）

お読みくださいまして、どうもありがとうございました。
何でも良いので感想などいただけたうれしいです。 涼木 昇

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0300v/>

赤い服の少女

2011年7月23日03時31分発行